

スプリント療法の効果と可能性

ハンドセラピィにおけるスプリント療法は、運動療法と共に治療効果を高める重要な治療手段であり、作業療法の治療技術の一つである。スプリント療法を成功させるためには、正確な病態把握に基づく適応の判断と作製に当たっての力学的知識の理解、スプリント療法の効果と限界の見極めが必要である。当会では、これらが段階的に習得できるようスプリントセミナーをベーシックとアドバンスに分けて実施している。ベーシックでは、スプリントの基礎知識を学び、最も作製する機会が多いスプリントを作製する実習を行っている。アドバンスでは、実際の症例を通して、参加者自らスプリントの適応を判断し、スプリントを作製するというより実践的な演習を実施している。このようにスプリントセミナーでは、基礎から応用までを学び、臨床にて効果的なスプリントをより多くの対象者に提供できるように取り組んでいる。しかし近年、手外科やハンドセラピィ技術の進歩は目覚ましく、スプリントも拘縮除去を目的とするものから、拘縮の予防、組織の治療促進を目的とするものが主流になってきている。このような現状の中、現在のスプリントセミナーだけでは十分に対応できているとはいえず、より多くの作業療法士にスプリントのタイムリーな知識、技術を理解して頂くため本セミナーを企画した。

今回企画するセミナーでは、ハンドセラピィの臨床の第一線で活躍する2名の講師による講演と症例検討を企画した。講演1の斎藤OTには、スプリント療法のRCT研究の結果を基に、スプリントの適応、効果的なスプリントの使い方についてお話しいただく。講演2の野中OTには、手外科診療の主流になりつつある早期運動療法におけるスプリントの応用についてお話しいただく。なかでも、臨床で経験する機会が多い手指骨折に対するスプリント療法の適応と効果についてお話しいただく。症例検討では、講師2名と参加者でスプリントの適応と作製について検討する。

臨床においてスプリントの効果を明確にし、将来的に作業療法技術としてのスプリントが診療報酬算定の足がかりになればと本セミナーを企画した。

司会

越後 歩 札幌徳洲会病院
整形外科外傷センター

Ayumu Echigo Orthopedic Trauma Center, Sapporo Tokushukai
Hospital

◆講師

斎藤 和夫 刈野辺総合病院
リハビリテーション科

Kazuo Saitou Dept of rehabilitation Center, Fuchinobe General Hospital

野中 信宏 愛野記念病院
手の外科センター

Nobuhiro Nonaka Hand Surgery Center, Aino Memorial Hospital

モーニングセミナー2 日本がんの作業療法懇話会 9月23日(土) 9:00~10:30 第3会場

緩和ケアを知ることによって変わる！「生きる」を支える作業療法の実践

2006年のがん対策基本法施行以降、わが国ではがん医療の均てん化が図られる中で、緩和ケアの推進とともに療養生活の質の維持向上を目的にがんのリハビリテーションの必要性が認知されるようになった。その後、2010年に診療報酬改定にて「がん患者リハビリテーション料」が新設されるとがんのリハビリテーションは全国の医療機関に急速に広まることとなった。

2人に1人ががんになる時代を迎え、高齢化とともにがん罹患者数も増加傾向にある中でがん患者の療養の場はがん治療を担う医療機関のみならず、療養型病院や在宅、高齢者施設、精神科病院に広まっている。そのため、がんおよび緩和ケアの知識は今後、一般病院に勤める作業療法士のみならず、領域を超えて幅広い作業療法士に求められる知識である。

緩和ケアとは、患者・家族を対象とし、身体的苦痛、精神的苦痛、社会的苦痛、スピリチュアルペインといったトータルペインに焦点を当てその苦痛の予防・緩和を図るためのアプローチをいう。心身の健康や日常生活、社会参加に目を向けた作業療法の実践がもつ意味を緩和ケアの視点からみた時、作業療法にはどのような効果があるのだろうか。そして、作業療法士はどのような役割を担うことができるのだろうか。

今回は、領域を超えて多領域での「がん」「緩和ケア」の実際を通じて作業療法士が担うべき「生きる」を支える支援について理解を深めたい。

1. がん・緩和ケアにおける作業療法の動向
2. 緩和ケアの視点でみた発達領域における作業療法の実践
3. 緩和ケアの視点でみた精神科領域における作業療法の実践
4. がん・緩和ケアにおける作業療法の今後の課題
5. 質疑応答・ディスカッション

司会

高島 千敬 広島都市学園大学

Kazunori Takashima Hiroshima Cosmopolitan University

島崎 寛将 大阪府済生会富田林病院

Hiromasa Shimazaki Osaka Pref. Saiseikai Tondabayashi Hospital

◆講師

伊藤 直子 かなえるリハビリ訪問看護ステーション

Naoko Itou Kanaeru rehabili home-visit nursing care station

織田 靖史 近森病院
総合心療センターデイケアメンタルYasushi Orita Chikamori Hospital General psychosomatic center daycare
“MENTAL”

本当に有効な支援機器開発に向けた取組の実践

支援機器は障害者の自立を支援する機器として不可欠な存在であり開発・普及に取組む作業療法士も多い。真に有効な機器が開発されるには、現場のニーズに基づいたアイデアを活かす専門家の連携が必要である。そこで我々は、2014年から医療・福祉系（リハビリテーション等）、デザイン系（プロダクトや美術等）、工学系（機械や電子工学等）などの学生からなるチームを編成し、障害当事者のための支援機器開発に取り組んでいる。また、2017年度からは日本作業療法士協会と連携予定であり、臨床や教育の場での応用が期待される。ここでは、これまでの取組を紹介し今後の支援機器開発のあるべき姿について参加者と共に整理したい。

①障害当事者のニーズに基づいた機器開発の取組

本取組は2014年度4校でスタートし、2016年度は11校が参加するに至っている。学生達は、障害当事者の意見を聞きアイデアを出し合い、指導教官等の助言を入れつつ機器を形にしてゆく。これまでの2年間の取組で、22機器（車いす関連、褥瘡予防、リハ訓練支援、レクリエーション機器、障害者用楽器、高次脳機能障害支援、視覚障害者支援、片麻痺支援等）を創出し、2016年度さらに新課題に取り組んでいる。

②成果の共有の促進や支援機器開発の促進の取組

得られた成果物や利用者のニーズは、本分野の情報共有の促進や支援機器開発の促進を図ることを目的に、成果発表会の開催、国際福祉機器展等で広く公表し、障害当事者や関係職種等から多く意見をj得ている。また、成果発表会では、有識者からフィードバックを受けて次年度に繋ぐことや製品化に向けたアプローチも検討している。以上の取組と意義についてリーダーの小野氏に紹介頂く。

③養成教育ツールとしての本取組の意義と方向性

学際的なチームによるニーズに基づいた取組は、座学では得られない課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びにつながる分野融合教育ツールとして有用である。現に、本取組を正規カリキュラム化して参加する作業療法士養成校もある。また、今後の本分野の生涯教育ツールとしての発展や全国エリアでの展開等必要な方策も検討している。以上の取組と意義について参加養成校の井上氏に紹介頂く。

本取組は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）[長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業；支援機器イノベーション創出のための情報基盤構築に関する研究] によった。

司会

東 祐二 国立障害者リハビリテーションセンター
Yuji Higashi *National Rehabilitation Center for Persons with Disability*

◆講師

小野 栄一 国立障害者リハビリテーションセンター
Eiichi Ono *National Rehabilitation Center for Persons with Disability*

井上 薫 首都大学東京
Kaoru Inoue *Tokyo Metropolitan University*

心臓リハビリテーションのevidenceと作業療法への適応

心疾患患者に対する心臓リハビリテーションの目的は心疾患患者の治療で長期安静や長期臥床が必要とされた時代の廃用症候群からの回復を図ることから、運動耐容能改善・冠危険因子の是正・QOL改善・再発予防・長期予後の改善など循環器疾患の予防と治療的取り組みへと変化しています。そのプログラムは運動処方に基づく運動療法に加え、栄養指導、生活指導、疾病管理のための患者教育、カウンセリングなど多職種による多面的な介入を基本としています。心臓リハビリテーションは多くのevidenceが集積されており、心疾患治療の重要かつ実施されるべき治療手段と考えられています。

平成26年の診療報酬改定で心大血管疾患リハビリテーションに作業療法士の参画が可能となり、合併症のみならず主病名として心大血管疾患患者に対応する機会が増えています。作業療法士が多職種協働を基本とする心臓リハビリテーションチームにおいて有効に機能するためにはevidenceに基づく心臓リハビリテーションの機能や社会的役割を十分に理解することが肝要です。

循環器臨床作業療法研究会では、多くの循環器疾患患者へ携わる作業療法士に広く情報を発信し、心臓リハビリテーション分野における作業療法士の活躍を手助けできるような場となるよう定期的に研修会を開催しています。多くの作業療法士が心臓リハビリテーションに関心を持ち、心臓リハビリテーションにおける作業療法の役割や方向性を共有し、臨床現場へ還元できるような会とすることを目指しています。

本セミナーでは心臓リハビリテーションに携わっている作業療法士ばかりでなく、今後心臓リハビリテーションに携わる予定の作業療法士や心臓リハビリテーションに興味のある作業療法士、病院ばかりでなく施設や地域で心疾患患者に作業療法を実践している方々にも有益な心臓リハビリテーションのevidenceと作業療法実施時のessenceをお伝えしたいと考えています。皆様の臨床で役立てていただければ幸いです。

司会

鈴木 真弓 埼玉医科大学国際医療センター

Mayumi Suzuki Saitama Medical University International Medical Center

村井 達彦 訪問看護ステーション花あかり

Tatsuhiko Murai Visiting Nursing Station Hanaakari

◆講師

生須 義久 群馬県立心臓血管センター

Yoshihisa Namasu Gunma Prefectural Cardiovascular Center

笹井 祥充 自治医科大学附属さいたま医療センター

Yoshimitsu Sasai Saitama Medical Center Jichi Medical University

精神障害者に対する認知リハビリテーションの実際～その2～

近年、認知機能障害が社会的転帰と密接に関連していることが明らかになり、認知機能障害へのリハビリテーションとして様々なものが開発、実施されている。統合失調症等の認知機能障害は、注意や記憶、遂行機能等の認知機能領域まで幅広く認められる。認知機能障害は「生活のしづらさ」として、生活の様々な側面に影響を与えている。患者さんの言葉では「頭がまわらない」「全然覚えられない」「頭が悪くなった」などのように語られることも多い。認知機能障害は日常生活能力や対人関係能力、作業遂行能力などに影響を与え、結果として就労などをはじめとしたwell-beingに幅広い影響を与える。

この領域については、作業療法士の活躍が期待されているものの、実践をしている施設や作業療法士は少ない状況である。また、残念ではあるが認知リハビリテーションの存在自体や、どのようなもので、どのように実施するものなのかということを知らない作業療法士も多い。しかしながら、認知リハビリテーションの視点や介入方法は、元来作業療法士が持っている特性を生かすことができ、今後の精神科作業療法や精神科デイケア、就労支援など様々な場面で必要になってくるものである。

昨年(2016年)の第50回日本作業療法学会のナイトセミナーにおいて、精神障害者に対する認知リハビリテーションの実際について話題提供を行い、フロアとの意見交換を行った。前は認知リハビリテーションにおける基礎知識と就労、精神科デイケアなど地域での実践や医療観察法病棟での実践について報告をしたが、今回は入院や外来など精神科作業療法室で実践している内容や導入について話題提供をする。精神科領域では精神科作業療法室に勤務している作業療法士が大多数であり、その大多数が「私たちのフィールドでもできる」と感じ、実際に実践に向かえる機会としたい。また、様々な認知リハビリテーションの拡がりを期待しているが、その基礎となる認知リハビリテーションを導入するためのアセスメントや効果判定、認知リハビリテーションの対象範囲なども合わせてお伝えしていきたいと思っている。

それぞれの発表者が認知リハビリテーションをどのように現場に導入したか等も含めて話題提供し、実践するにあたっての問題解決や他の作業療法プログラムとの兼ね合いなど実際のディスカッションができればと考えている。

司会

岩根 達郎 京都府立洛南病院

Tatsuro Iwane *Kyoto Prefectural Rakuman Hospital*

芳賀 大輔 NPO法人日本学び協会ワンモア豊中

Daisuke Haga *job training institution ONEMORE TOYONAKA*

◆講師

岸 雪枝 兵庫医科大学病院 リハビリテーション部

Yukie Kishi *Department of physical medicine and rehabilitation, Hyogo collage of medicine collage hospital*児嶋 亮 医療法人桜花会
醍醐病院Ryo Kojima *Medical corporation Okakai association Daigo Hospital*村尾 卓嶺 医療法人千水会
赤穂仁泉病院

Murao Takane